

# ロシア文学におけるモスクワ表象 ——「第三のローマ」説を中心に——

佐光 伸一

はじめに

ロシア文学において作家・詩人達の想像力を掻きたててきた神話的トポスとして、これまで注目されてきたのはもっぱら「ペテルブルグ神話」であった。しかしロシアの歴史においてペテルブルグの対立項としてさまざまな領域で比較の対象とされてきたモスクワは、どのような形で文学作品の想像力の源となってきたかは、あまり知られていない。本発表では、モスクワに関する神話のひとつである「モスクワ—第三のローマ説」を中心に、都市モスクワが文学作品の中にどのように表象されてきたかを検討してみたい。

第三のローマ説とはプスコフの修道士フィロフェイが16世紀初頭にイヴァン三世、ヴァシーリー三世、大公の書記ムネヒンに宛てた三つの書簡の中で表した考えである。それは古きローマは異端の思想ゆえに滅び、続いて選ばれたコンスタンチノーポリの都も第八宗教会議での裏切りにより蹂躪され、無傷で残っているのは神に加護された第三のローマなるモスクワの栄えある普遍的教会ウスペンスキイ寺院のみである。第三のローマは人類史において最後の帝国で、第四のローマはないであろう、この最後の世界帝国ロシアの後には、キリストの永遠の国が来て、ローマにおいても見出せなかった平安はロシアにおいて永遠に見出されるだろうという考えである。この説は、近代化の途上にあつた19世紀ロシアの思想界のみならず芸術家たちにもさまざまな形で影響を与えたことはよく知られている。例えばパステルナークの『ドクトル・ジヴァゴ』における次のような一節を読めば、その残響は20世紀にまで及んでいることが伺える。

眼下、はるかに広がるモスクワ、このノートの筆者と彼の身に起こった半数以上の事件の故郷であるモスクワがふたりには今これらの出来事が起こった場所ではなく、この夕べ、ノートを片手に彼らが結末に辿りつこうとしている長い物語の主人公のように思われた。[…]

窓のところに佇むこの年老いた友人達には、この魂の自由がすでにやって来て、まさにこの夕べ未来が眼下の通りに手に触れられるかのように腰を落ち着け、彼ら自身がすでにこの未来に足を踏み入れそしてこれからはずっとそこに存在するかのように思われた。この聖なる都をこの地上の全てを、この夕べまで生き延びたこの歴史の参加者たちとその子供たちに思いをは

せるとき、幸福な感きわまった安堵感で彼らはいっぱいになった。<sup>1</sup>

## 1. 第三のローマとしてのモスクワあるいはペテルブルグ

先述したようにこの「モスクワ第三のローマ」説は 1523–1524 年に形成され、1589 年にモスクワに総主教座が置かれた際に、公的に文書化された。「新しいローマ—コンスタンチノーポリ」が 389 年の第 2 回公会議で決定され、「第三のローマ—モスクワ」1589 年のロシア正教会の地方会議で決定というように、いずれも教会文書によって決定されている。しかしそれはすぐにロシアに広まることはなかった。というのもそれは

①ビザンチンを継承することはその破滅をも受け継ぐということ、  
②ビザンチンを継承することは、ロシア人に由来するものではなく、反トルコ連合にロシアを引き入れるために、ローマ法王が考案したもの、  
という二つの危険性を孕んだ両義的価値観だったからである。この思想が注目されるのは、東方問題が盛んになった露土戦争時に、コンスタンチノーポリ陥落後、ロシアがその継承者の役割を名乗り出た際に再定義されたことによる。

それどころかピョートル時代には「第三のローマ」を継承するのは、モスクワではなく、ペテルブルグだという概念が生まれた。それは「モスクワ第三のローマ」説が持っている二重性に由来する。

「モスクワ第三のローマ」という理念はその本質上、二重的なものである。一方でそれはモスクワ公国と至高の精神的宗教的価値観とのつながりを意味している。信仰心をモスクワの主要な特徴そして基本的国家力としながら、この理念はビザンチンに対する方向性の神学的側面を強調していた。この案ではこの理念は「不浄な土地」からの離脱を意味していた。その一方、コンスタンチノーポリは第二のローマと考えられた。つまりこの名称と結びついた政治的シンボルにおいて帝国の本質が強調され、ビザンチンの中に世界帝国が見出されたのである。このように「モスクワ第三のローマ」という理念の中には宗教的、政治的という二つの流れが融合している。<sup>2</sup>

Ю.ロトマンはピョートル 1 世が国の統治者としての称号を「ツァーリ」から「大帝」に変更したことにみられるように、ローマの継承者としての役割を担おうという志向性が即位後すぐに見られると指摘し、ピョートル以前のモスクワ＝教皇のローマというパラダイムを創りだし、ビザンチンの真の継承者である永遠の皇帝の都はペテルブルグにほかならなと、政治的理念だけでなく精神的理念においても、モスクワから第三のローマの地位を奪おうとしたと論じている。この「第三のローマ」を軸としたモスクワ／ペテルブルグの対立は文学作品にどのように表現されているのであろうか。

<sup>1</sup> Пастернак Б. Полное собрание сочинений с приложениями в одиннадцать томах. Т. 4. М., 2004. С. 514.

<sup>2</sup> Лотман Ю.М. Отзвуки концепции «Москва—третий Рим» в идеологии Петра Первого // Избранные статьи в трех томах. Т. 3. Таллинн. 1993. С. 203.

## 2. ゴーゴリとモスクワ

1931年頃から構想を得た『ネフスキイ大通り』(1835年)に始まり『鼻』(1836年)、『肖像画』(1835年)、『外套』(1942年)、『狂人日記』(1835年)にいたるゴーゴリの一連の小説は「ペテルブルグ小説」と呼ばれる。彼のデビュー作である『ディカーニカ近郷夜話』(1831-1832年)やそれに続く『ミールゴロド』(1835年)に収められていたほとんどの作品がウクライナを舞台とし、ウクライナの民間伝承から題材がとられたものが多かったことから明らかなように、ゴーゴリにとって小説の舞台となる土地や街は彼の想像力の大きな源となっている。

その「ペテルブルグ小説」と同時期に執筆された未完の中編小説に『ローマ』(1842年)という作品がある。この作品ではゴーゴリ自身が実際に生活したローマを舞台に物語を展開しながらも、古都ローマの魅力、その歴史的役割が主題となっており、ローマという都市そのものがこの小説の主人公と言ってもいいような作品となっている。そしてここで描かれるローマとは、単に彼が知っているヨーロッパの一都市ではなく、ゴーゴリの中でローマはモスクワとひとつながりのものとして認識されている。

この作品は一貫して「ローマ／パリ」という対立を軸に物語が構成されている。これが「モスクワ／ペテルブルグ」という対立の置き換えであることは作品における両都市の意味付けを検討すれば、明らかである。

主人公はローマの貴族出身の青年である。彼には自らが育ち教育を受けたローマに閉塞感を持っている。

学問というものが、干からびたスコラ派の教えの型に閉じこめられ、やっと存在を続けているにすぎなかったイタリアの大学は、新しい若い青年たちを満足させなかった、彼らはすでにアルプスの山々を越えてやってきていた、いきいきした学問の気配を、ときには感じていたのである。上部イタリア地方ではフランスの影響がようやく、はっきり目につくようになって来ていた、そこへは流行や、ヴィニェットや、<sup>ヴォードヴィール</sup>小喜劇や、奔放なフランスのミューズの、——奇形で、熱情的ではあるが、ところどころに才能の閃きを見ないわけにはいかない緊張した諸作品が押し寄せてきていたのだ。<sup>3</sup>

ここに見られるように、ローマはヨーロッパの学問や芸術の進歩から取り残されたヨーロッパの辺境の土地と見なされている。突然、青年は父の命令でパリに留学することになり、念願の夢がかなえられることとなる。パリに到着した彼は、イタリアの自然の美に対立するパリの街の人工性に感銘を受ける。

彼はまだ見たことも聞いたこともない豪華な装飾に燦然と輝いたカフェの光景に、うっとり  
と見とれて歩いていった、また有名なアーケードに驚きの目を見はりながら歩いていった、そ

<sup>3</sup> ニコライ・ゴーゴリ(横田瑞穂訳)「ローマ」ゴーゴリ『ゴーゴリ全集3』河出書房新社、1976年、316-317頁。

ここには、ほとんど若い人たちから成る雑踏があり、そのひびきわたる幾千となき足音は彼の耳を聳した、そこにはまた、歩廊の瑠璃天上をとおしてもれてくる光に照りかがやいた店々が並んでいて、その光は彼の目を幻惑した、[...] <sup>4</sup>

ここで描かれるパリは、ゴーゴリ作品のペテルブルグにほかならない。

全能のネフスキイ大通り！ [...] その重みで石畳の花崗岩さえひび割れそうに思われる退役兵士の不細工な、泥だらけの長靴や、向日葵が太陽に向かうように、その頭を輝かしい店の窓へ向ける若い婦人の、小さくて優雅な、煙のようにかかるがるとした可愛い編上げや、また希望にあふれている見習士官の、道に鋭い搔き傷を残してゆくサーベルや——すべてがその舗道の上に力強さの威力を、または、なよなよしさの力をするしてゆくのである。わずか一日のうちに、なんと目まぐるしい幻影がその歩道の上につくられてゆくことだろう！ <sup>5</sup>

「ローマ／パリ」という対立が「東／西」、つまり「後進性／先進性」という対立にしたいにはっきりと置きかえられて行く。

パリよりいいところがどこにあるぞ？ どんないいものがあったとて、彼はきつこの生活をほかのもの、とりかえたりなぞしなかったであろう。ヨーロッパの心臓そのものに住んでいることのなんといいという楽しさ、なんといいという喜ばしさ！ まあ諸君もそこへ一度行ってみるんだね、そうしてどこか高いところへスーッともっていかれたような気持ちになり、偉大な、世界的な人々の集まりの中の一人であることをしみじみ味わってみるんだね！ で、彼の頭には、もう二度とふたたびイタリアなんぞへ帰ってゆくものか、いつまでもいつまでもパリに残っていてやるぞ、という考えが、いつも離れなくなってさえたのである。いまでは、彼には故国イタリアは、生活とあらゆる動きが、ぱったり歩みをとめたヨーロッパの片隅の、なんだか暗い、黴の生えたところでもあるような気がしたのだ。 <sup>6</sup>

しかしこの「パリ＝先進性」という肯定的イメージは堅牢なものではない。「ペテルブルグ小説」において都市ペテルブルグのイメージが常に二重であったように、パリもその姿の表層性をあらわにしていく。4年間パリで過ごした主人公にとって、この街の魅力は幻のように消え去っていく。

自分の生活がいかに多方面にわたっていても、また、いかに活発な動きを見せていても、それは結局なんの実もむすばず、なんの精神的成果をもたらすことなく消えていってしまうことに彼は気がついたのであった。 <sup>7</sup>

---

<sup>4</sup> 同上、319–320 頁。

<sup>5</sup> ニコライ・ゴーゴリ（横田瑞穂訳）「ネフスキイ大通り」ゴーゴリ『ゴーゴリ全集 3』河出書房新社、1976 年、8 頁。

<sup>6</sup> ゴーゴリ「ローマ」325 頁。

<sup>7</sup> 同上、326 頁。

とにかくいまやパリは、そのあらゆる輝きをもってしても、そのにぎわしさををもってしても、彼にとってはひとつのたえがたい砂漠と化してしまった。<sup>8</sup>

留学を切り上げローマに帰ることになったこの青年の前にローマは、以前そこを後にしてきた時とはまったく違った姿で現れる。

そうしてついに六日の旅程の後に、晴れやかな地の果てのかなたに遠く、澄みわたった空の上に、くっきりと美しく半円を描いた丸屋根が姿をあらわしたとき——おお！……そのとき彼の胸にいちどに迫ってきたその感情！<sup>おもい</sup> 彼はそれをつたえる言葉を知らず、またつたええなかった、彼はどのひとつの小さな丘にも、ひとつの坂にも目をとめてつくづくとながめいった。<sup>9</sup>

ここでは先述した「ローマ／パリ」という対立の意味付けがまったく新しく解釈しなおされていることは、明らかである。さまざまな文化を折衷的につぎはぎしたパリの持つ価値観の表層性に対し、ローマの持つ歴史性からくる普遍性が対置されている。そしてこのゴーゴリはこのローマこそロシアにおけるモスクワだと見なしていたことは、プーシキンの『エヴゲーニィ・オネーギン』の有名なモスクワに対する呼びかけの詩行は上記のゴーゴリのローマの描写とぴったりと符合する。

だがもう近い。彼らの前に／<sup>ましろ</sup>真白の石のモスクワの／年を経た円屋根が、早くも<sup>きん</sup>黄金の十字架を／きらめかせつつ炭火のように燃えている。／同胞諸君！ かつて私の目の前に／教会や<sup>しょうろう</sup>鐘楼や庭園や宮殿などの半円が／思いも掛けずに現出したとき／私はどんなにうれしかったか！／<sup>さすらい</sup>漂泊の運命に弄ばれて／<sup>わかれ</sup>悲しい別離の中にいたとき／モスクワよ いく度<sup>たび</sup>おまえを偲んだことか！／おおモスクワ…このひとことの響きの中に／いかばかり多くのものが溶け合っていることだろう！／いかばかり多くのものが<sup>こだま</sup> 砦をかえすことだろう！<sup>10</sup>

ゴーゴリ自身の念頭にローマ＝モスクワという構図があったのは友人に次のように打ち明けていることから、明らかである。

彼は私がどこに住むつもりかを尋ねた。私は、分からないが多分モスクワだろうと答えた。ゴーゴリは私に答えてこう言った。「それがいい。ローマの生活になじんだ者には、ローマの後に気に入るのはただモスクワだけ」<sup>11</sup>。

そのモスクワに対しゴーゴリにとって「パリ＝ペテルブルグ」は偽りの文化の集積に過ぎないのである。

<sup>8</sup> 同上、329頁。

<sup>9</sup> 同上、332-333頁。

<sup>10</sup> アレクサンドル・プーシキン（木村彰一訳）『エヴゲーニィ・オネーギン』講談社文芸文庫、1998年、312頁。

<sup>11</sup> *Машинский С.И.* (ред.) Гоголь в воспоминаниях в современников. М., 1952. С. 229.

ネフスキイ大通りを、動いている都と呼ぶことのできる祝福すべきその時刻には、ありとあらゆるりっぱな人間・製品の大展覧会が開かれる。ある者は上等なビーバー（海狸）の襟のついた粋なフロックコートを見せ、ほかの者は——ギリシャふうのみごとな鼻を、第三のものはすばらしい頬ひげを、[...]第八の者は、びっくりさせるような口ひげを見せてくれるのである。

12

それに対置されるローマの風景こそ永続する文化を形象化したものに他ならない。

彼には第四の景色があらわれてきた、野原の果てるところにローマの街があった。はっきりと鋭く家々の輪郭が輝いていた。円屋根の丸み、ラトランのヨアンの像、そして聖ピエトロ寺院の荘厳な円屋根、それは、そこから遠くはなればはなれるほど、いよいよ高さを増してゆくのだが、すでに、もう全ローマの街がすっかり姿を隠してしまったときにも、それはただひとつ地平線の上に威圧するように姿を残すのである。<sup>13</sup>

しかしこのローマ＝モスクワはゴーゴリの生きた時代においてまるで歴史的使命を終えたかのように、冷遇されている。このことを主人公であるローマの青年は嘆く。

これらのものはみな、束の間に消えてゆき、過ぎ去っていった、冷めた溶岩のように、いっさいが、冷たく凍ってしまい、ちょうどあの古くなって役に立たなくなった寺院の殿堂のように、ふりかえられることもなく、ヨーロッパから忘れさられてしまった。政治的意義を失い、同時にまた世界への影響力を失った、あわれなイタリアは、いまではどこにも、雑誌のなかにおいてすら、自分の王冠を奪われた額をのぞかせることもしないのである。<sup>14</sup>

ゴーゴリが主人公にこのように語らせる時、このローマは突如政治的な意味を持つてくる。プーシキンは1834年の評論「モスクワからペテルブルグへの旅」の中でペテルブルグに対し衰退したモスクワについて考察している。

ピョートル一世はモスクワを愛さなかった。モスクワでは一歩歩くごとに叛乱や処刑の記憶、根深い旧習、迷信と偏見の反抗とであったからである。彼がクレムリ〔クレムリン〕を去ったのは、息苦しかったからではなく、きゅうくつだったからである。そしてバルチック海の遠い岸辺に、自分の力強い落ち着かぬ活動のための自由、広がり、閑暇を求めたのである。[...]モスクワの衰頹は、ペテルブルグ興隆の不可避的結果である。両首都は、人体に二つの心臓が存在し得ないように、同一の国家の中で同程度に栄えることは出来ない。<sup>15</sup>

<sup>12</sup> ゴーゴリ「ネフスキイ大通り」13頁。

<sup>13</sup> ゴーゴリ「ローマ」343頁。

<sup>14</sup> 同上、346頁。

<sup>15</sup> アレクサンドル・プーシキン（川端香男里訳）「モスクワからペテルブルグへの旅」プーシキン『プーシキン全集5』河出書房新社、1973年、94頁。

ちょうど「干からびて型にはまったイタリア」から脱出してフランスへと旅立った『ローマ』の主人公は、モスクワが「きゅうくつだった」のでペテルブルグを建設したピョートルと符合する。先に引用したロトマンが語るようにペテルブルグはその歴史的役割を奪われたままである。しかしゴーゴリはここでローマ＝モスクワの復権を唱える。

こういう厳粛な瞬間には、彼は自分の祖国の崩壊と和解することができた、そのときには、永遠の創造者がたえずこの世に準備してしてくれる永遠の生命、すなわちよりよき未来の萌芽が、すべてのもののなかに彼には見られた。また、そういう瞬間には、彼はローマ市民の今日の使命にさえ非常にしばしば思いをいたした。そして彼は、ローマの市民のなかにまだ手をつけられずに残っている素材を見いだすのであった。<sup>16</sup>

いま、永遠の街、ローマは彼の前に不思議な美しさに輝くひとつのパノラマとなってあらわれたのだ。いましも沈みゆく入り日の光を強く受けて、数知れぬ家々や、寺院や、円屋根や、尖塔の群れは燦然と明るく輝いている。<sup>17</sup>

ここまで展開されてきた「ローマ／パリ」つまり「モスクワ／ペテルブルグ」という対立を考察すると、

ローマ (モスクワ)	⇔	パリ (ペテルブルグ)
東		西
ロシア		ヨーロッパ
文化		文明
永遠性		一時性
過去		現在
未来の約束		現在の惰性

と言った対立項が挙げられる。

この作品では主人公のローマの青年が街で出会った美しい女性を探し始めることからプロットが動き始めるが、そこで先に引用したローマ＝モスクワの永遠性という思想が唱えられるところで作品が閉じられる。それはちょうど『ネフスキイ大通り』において街でまたまた出会った女性に惹かれたピスカリョーフとピロゴーフの物語に対応している。同じ物語をペテルブルグ、モスクワ（ローマ）という対極的な二つの街で展開させるというように、この両作品は互いの裏返しの作品となっていたのである。「ペテルブルグ小説」におけるピスカリョーフの幻想的で悲劇的な恋愛とピロゴーフのパロディ的な恋物語が、モスクワではどのように展開されることになったかは、ゴーゴリのモスクワ観を考える上で興味深いが、この作品が未完に終わっていることによってその比較は不可能となっている。

<sup>16</sup> ゴーゴリ「ローマ」349頁。

<sup>17</sup> 同上、373頁。

### 3. 二重性のモスクワ

ゴーゴリ作品で描かれた「モスクワ」は「第三のローマ」説の世界観に適う予定調和的なヴィジョンだった。これはその後のロシア文学においても変わることなく安定した神話を提供し続けたのだろうか。

20世紀に入り、同時代のモスクワを物語の舞台にしなが、宗教的ヴィジョンを背景に絶えず古代ローマを喚起させる長編小説がふたつある。ひとつは先に引用したパステルナークの『ドクトル・ジヴァゴ』、もうひとつはブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』である。ここではその「モスクワ」と「ローマ」がどのような形で重ね合わされているかを検討したい。

『巨匠とマルガリータ』第29章では、ヴォランドと彼の従者アザゼッコが、モスクワの眺望をすみずみまで見渡せる建物のテラスに立っている。モスクワを眺めながら、この街に対する考えを述べ合う。

ヴォランドが口を開いた。

「何と面白い町だろう、そうじゃないか？」

アザゼッコは微かに身体を動かし、恭しく答えた。

「閣下、私はローマのほうが好きです」

「そうか、それは好みの問題だな」ヴォランドが答えた。<sup>18</sup>

このようにモスクワとローマを直接比較することで、その後に展開されるモスクワ＝ローマのアレゴリーに対する予告を行なっている。この章の終わりでヴォランドがモスクワを永遠に後にする際の描写は、ロシア文学におけるこれまでのモスクワ表象と趣を異にし、きわめて象徴的である。

「間もなく雷雨が、最後の雷雨がやって来る、それが仕上げるべきことはすべて仕上げる、それで我々は旅立つのだ」

[…]

ヴォランドが言っていた雷雨は、既に地平線のあたりでうごめきだしていた。黒雲が西に沸き立ち、太陽を半分遮った。次にそれを完全に覆ってしまった。テラスが涼しくなった。さらにしばらくすると暗くなった。

西からやって来たこの闇が巨大な町を包んだ。橋が消え、宮殿が消えた。すべてのものが、まるでこの世にかつて存在しなかったかのように消え失せた。一筋の火の糸が空を駆け巡った。次に雷鳴が町を揺るがせた。再び雷鳴が起こり、雷雨が始まった。ヴォランドの姿はその霧に包まれ見えなくなった。<sup>19</sup>

<sup>18</sup> ミハイル・ブルガーコフ（法木綾子訳）『巨匠とマルガリータ（下）』群像社、2000年、190頁。

<sup>19</sup> 同上、195頁。

従来のブルガーコフ研究では、第 29 章から第 32 章にかけては「ヨハネ黙示録」を下敷きにしているという解釈がなされてきた。ディヴィット・ベセアはロシア文学における黙示録文学を分析した著書の中で、次のように言っている。

第 30 章から第 32 章はロシア文学において最も念入りに作られただけでなく、最もあからさまな「ヨハネの黙示録」のパロディになっている。これはある種の高尚なパロディであり、ナボコフが述べたように、原典に対し敬意を捧げていて、絶えず真のポエジーを伴っていて、モスクワの章に多く見られるような原典の「グロテスクなイメージ」を与えるようなものではない。もちろん、それは最後の場面ということでもある。われわれはブルガーコフが悲劇的な調子へと高まっていることによって、何か真摯なものの上に立たされていることをすぐに了解する。それは第 32 章の美しい宗教的な冒頭において最もよく表現されている。<sup>20</sup>

その第 32 章とは以下のようなものである。

神々よ、我が神々よ！ 宵の大地の何と物悲しいことか！ 沼地にかかる霧の何と神秘的なことか！ こうした霧の中をさ迷い歩いたことのある者、死を前に苦しみ多かりし者、力に余る重荷を背負ってこの大地の上を飛んだことのある者なら、それを知っている。それを知る者は疲れ果てた者だ。そしてその者は惜しみなく大地の霧やその沼や川を捨て、軽やかな心で死の腕かひなに身を委ねる、ただそれだけがわが身の安らぎと知りつつ。<sup>21</sup>

跡形もなく消え失せるという実在性の欠如は、ロシア人の中で形成されてきたペテルブルグの神話的トポスと重なるものである。この作品に繰り返し出てくる終末論的なモチーフや、ブルガーコフの初めての長編小説『白衛軍』の冒頭にエピグラフとして『ヨハネの黙示録』の一節「死者は此等の書に録されたる事に由り、其行に従いて審判を受けたり」が用いられていることから明らかなように、執筆の際、ブルガーコフの念頭には『ヨハネの黙示録』が合ったことは疑いのない事実のように思われる。しかしここではモスクワ崩壊の様子の様子の描写の類似性から、むしろ旧約聖書の「ダニエル書」が想起される。このでは「ダニエル書」に照らして、この作品の終末部が持つ意味を検討してみたい。

先述したモスクワの持つ神話的トポスは第 31 章の終わりで現実のものとなる。

巨大な岸の一角が波止場とレストランもろとももぎ取れて、河の中の島となった。河の水が沸き立ち、吹き上がり、緑なす低地になっている対岸へ水上バスがまるごと、ほとんど無傷の乗客を乗せたまま打ち上げられた。＜中略＞一瞬黒い覆いが脇にそれたとき、マルガリータは駆けながら振り向いたが、後方には色とりどりの塔も、それらの上で旋回する飛行機もないばかりか、町自体ももう大分前から地中へと去ってなくなり、その名残りはただ霧ばかりだった。<sup>22</sup>

<sup>20</sup> David M. Bethea, *The Shape of Apocalypse in Modern Russian Fiction* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1989), pp. 223–224.

<sup>21</sup> ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ（下）』215頁。

<sup>22</sup> 同上、214–215頁。

一方、「ダニエル書」第2章ではバビロン王ネブカドネツアルの見る夢をダニエルが解釈するという内容を持っている。

王よ、あなたがじっと眺めておられると、どうでしょう、巨大な像が一つ現れました。[…]  
あなたがじっと眺めておられると、しまいには一つの石が人手によらず切り出され、鉄とタイ  
ルでできたこの像の足を叩き、粉々に砕きました。<sup>23</sup>

この王の夢を解釈してダニエルは、その像が王の治世の跡も代々受け継がれていく王国を表し、それを粉々に砕く石はその王国を滅ぼすことになる神意により生まれた王国を意味すると説く。

この王たちの治世に、天の神は永久に消滅することのない王国を興されます。その王国は他民族に渡されることはなく、これらの王国をすべて砕いて滅ぼし、自らは永久に続きます。<sup>24</sup>

「ダニエル書」は一貫して夢を解釈し、それを世界史の現実と未来に適用するという形をとっている。このネブカドネツアルの夢に基づき、ブルガーコフの描くモスクワを解釈すると、「モスクワ—第三のローマ」説がきわめて捻れた形で反映されていると言える。この「ダニエル書」は「モスクワ—第三のローマ」説の提唱者プスコフの僧フィロフェイの思想の源泉となったことはよく知られている。

フィロフェイの思想にはもう一つ、広く知られた理念を指摘することができる。帝国が順次交替する、あるいは継承されるという理念である。この考え方の出発点となるのは、旧約聖書中の一書ダニエル書の第二、第七章にみられる四つの世界帝国の継起的交替に関する夢と幻と考えられるが、その第四の、最強ではあるが、終わりのときにいったって神によって滅ぼされるべき帝国が具体的にはどの帝国をさすのかという点が、ローマの侵略の前にあえぐユダヤ人たちの時代から、ローマ、ビザンツを経てロシアの時代にいたるまで、様々な解釈をよびおこしてきた問題であった。<sup>25</sup>

このように「第三のローマ」という思想は、歴史においてロシアが担う救世主としての役割を唱えた予定調和的な思想ではなく、その源泉まで辿ると国家の破滅の予言という解釈の可能性を孕んだ、国家にとってはきわめて危険な、そして芸術家にとってはきわめて多様なインスピレーションの源となる奥深い思想であると言える。

つまり「ダニエル書」の説く「国家の避け難い破滅の運命」に着目するか、あるいはその後に来る「新しい王国の到来」に着目するかにより、そこから現れてくるヴィジョンは全く正

<sup>23</sup> 村岡崇光訳『ダニエル書、エズラ記、ネヘミヤ記（旧約聖書 14）』岩波書店、1997年、8-11頁。

<sup>24</sup> 同上、11-12頁。

<sup>25</sup> 栗生沢猛夫「モスクワ第三ローマ理念考」金子幸彦編『ロシアの思想と文学：その伝統と変革の道』恒文社、1977年、19頁。

反対のものになってしまう。

ブルガーコフがここで描くモスクワは「天の神によって創られた永久に消滅することのない王国」ではなく、それに先立つ「砕いて滅ぼされる王国」である。巨匠とマルガリータが救済を得たのは、そのモスクワから時空間を異にする世界である。巨匠は同時代のモスクワにいかなる普遍性や永続的な価値観をも見ていないのは彼の発する次のセリフからも明らかである。

君と私みたいにすっかり身ぐるみ剥がれてしまった人間が彼岸の力に救いを求めてしまうのは当然さ！ まあいい、向うで求めるとするか。<sup>26</sup>

ブルガーコフの世界観の中では此岸（モスクワ）と彼岸（救済の場所）は全く異なる位相に属している。同時代のモスクワをローマと重ね合わせながら、モスクワは神の国としての後継者となることは出来ない。ここで描写されるモスクワ＝ローマはキリスト教につながっていくような精神世界に基づいているのではなく、あくまでも現実の政治世界のレベルでの同時代のモスクワである。

#### 4. 捏造される「モスクワ—第三のローマ」

19世紀ロシア文学史においてロシアの歴史を考察したことでとりわけ有名な作品にも、この「ダニエル書」が登場する。それはフョードル・チュッチェフの作品「ロシアの地理」（1848–1849年）である。

ロシアの地理

モスクワ、ペトロの都、そしてコンスタンティヌスの都——  
まさにこれがロシア皇国の遺訓となる都……  
しかしロシアのはてはどこにある？ その境界——  
北は、東は、南はそして日の沈む場所は？  
来るべき未来に運命がそれらを明らかにするだろう……

7つの内海と7つの大河……  
ナイル河ならネヴァ河まで、エルバ島から中国にいたるまで、  
ヴォルガ河からユーフラテス河、ガンジス河からドナウ河まで……  
まさにこれがロシア皇国、そしてそれは過ぎ去ることは永遠にない、  
ちょうど聖霊がそれを予見しダニエルが予言したように。<sup>27</sup>

従来この作品は「第三のローマ」説との関連で解釈されることが多かった。そして彼をこの説の文学における提唱者と見なし、スラヴ派という地位に祭り上げていたように思える。

<sup>26</sup> ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ（下）』200頁。

<sup>27</sup> Тютчев Ф.И. Полное собрание сочинений и письма в шести томах. Т. 1. М., 2002. С. 200.

しかし彼とスラヴ派、彼と「第三のローマ」説との関わりは一義的に結論付けることは出来ない。むしろ彼の詩人としての独自のヴィジョンに支えられた部分が大きいように思われる。「19世紀-20世紀の歴史記述と歴史哲学における「第三のローマ」」において編集者のA. H.サハロフは次のように書いている。

「東方問題」、ツァーリグレードのテーマ、スラヴ民族の統一は、彼の政治論文、そして詩の中に大きな位置を占めているし、彼が「第三のローマ」の理念を信奉していたとしばしば書かれているが、実際彼には「第三のローマ」という理念を持ってはいなかった。<sup>28</sup>

冒頭の二行「モスクワ、ピョートルの都、そしてコンスタンティヌスの都——／まさにこれがロシア皇国の遺訓となる都……」に注目したい。ここでは、「モスクワ」、「ペトロの都＝ローマ」、「コンスタンティヌスの都」が同等に列挙されている。モスクワが、ローマ、コンスタンチノーポルを受け継ぐという思想や、モスクワがその最後の永遠の都となるという理念は見うけられない。「遺訓となる都」(Заветные столицы) というようにひとくくりされている。さらに「遺訓となる」(Заветные) と形容詞により、「モスクワ」も最後に来る王国、ここでは彼が呼ぶところの「ロシア皇国」により乗り越えられるという思想を語っているように思われる。従って、この作品では「モスクワ—第三のローマ」説ではなく、作品に「ダニエルが予言したように」とあるように、「ダニエル書」が直接のコンテクストとなっていると考えるほうが自然である。それを裏付けるように、チュッチェフは、同時期に書かれた彼の政治論文「ロシアと西洋」の第6章への資料という形で添えられている補稿の中で、帝国に対する考察をめぐらし、そこで次のように語っている。

ロシアはスラヴ的であるよりはるかに正教的である。まさに正教国として、ロシアは帝国を自らの中に含み保持している。

帝国とは何か？ 帝国についての教えがある。帝国は不死なのである。それは受け継がれていく。この継承という現実。4つの交代する帝国。5番目が最後でそして最終的なものである。<sup>29</sup>

ここで述べられていることは、モスクワは異端に走って滅んだ第一と第二のローマにかわって正しい教えを守る第三のローマであり、その後第四のローマはありえないだろうというフィロフェイの「第三のローマ」説とはまったく合い入れない考えである。5つの王国とは「ダニエル書」の次の記述によるものと思われる。

金の頭はあなたなのです。あなたのあとに、あなたより劣る別の王国が興り、続いて別の第三の、青銅の王国が興って、全地を支配します。第四の王国は、一切を粉砕する鉄にも似て、その鉄のように強く、すべてを粉々にする鉄のように木端微塵に砕きます。＜中略＞山から一

<sup>28</sup> Сахаров А.Н. «Третий Рим» в историографии и историософии XIX–XX вв. // Сахаров А.Н. (ред.) Проблема святых и святости в истории России; материалы XX международного семинара исторических исследований “От Рима к Третьему Риму”. М., 2006. С. 16.

<sup>29</sup> Тютчев Ф.И. Полное собрание сочинений и письма в шести томах. Т. 3. М., 2003. С. 195.

つひとの石が人手きによらずだ切り出されて、鉄てつと青銅せいどうとタイルきんぎんと金銀くだを砕くのをご覧になったのはそういうことです。大いなる神は、今後おおなにこんごが起おうこるかを王おうに知らせたのです。<sup>30</sup>

その4つの王国が崩壊した後に来る第5の王国が「ロシア皇国」だと言うのである。しかし果たして具体的に何を指すかは、「7つの内海と7つの大河…／ナイル河ならネヴァ河ま／エルバ島から中国にいたるまで、／ヴォルガ河からユーフラテス河、ガンジス河からドナウ河まで…」という詩行に見られるように、漠然としている。むしろ具体的な政治的ヴィジョンに基づいたものではないと考えられる。イギリスのチュッチェフ研究家のR.レインは彼の政治的見解に触れ、次のように語っている。

チュッチェフの政治的見解は、彼の論文や手紙にその反映が見られるが、それは歴史的洞察力と歴史的幻想が、理知的見解とあからさまの先入観が、現実と神話想像力が独特な形で融合したものである。<sup>31</sup>

まして芸術的創作物である抒情詩においてその主題が政治的・思想的プロパガンダと直接的に結びついているとは考えられない。この作品の基となっている「ダニエル書」そのものが王の夢を解釈すると言うように、多義的な解釈を可能とする文学テキストとしても機能する。それに呼応して生み出されたチュッチェフのイメージーションを一義的に「モスクワ—第三のローマ」説に帰属させることは出来ない。

## 5. 救済としてのモスクワ

最後にソヴィエト時代、「モスクワ—第三のローマ」というイメージがその閉塞的な現実からの救済のヴィジョンとしてどのように機能したかを考察するため、先にも言及した『巨匠とマルガリータ』と『ドクトル・ジヴァゴ』のエピローグを比較したい。

『巨匠とマルガリータ』に添えられたエピローグでは第31章で描かれたモスクワの崩壊がまるでなかったかのように、いつもと変わらないモスクワの姿が描かれている。

だがそれにしても、土曜の晩の日暮れにヴォランドが雀が丘からその従者ともども姿を消して首都を去ってから、モスクワでは何があったのか？

その後長期間、首都中にまるでありそうもない噂の重苦しいどよめきが広がり、ものすごい早さで地方の僻遠の地まで飛び火したことは言うまでもない。そうした噂は繰り返すことさえ胸がむかつく。<sup>32</sup>

<sup>30</sup> 村岡訳『ダニエル書、エズラ記、ネヘミヤ記』11頁。

<sup>31</sup> Лэйн Р. Публицистика Тютчева в оценке западноевропейской печати конца 1840-х—начала 1850-х годов // Макашин С.А. (ред.) Литературное наследство том девяносто книгах в двух книгах Федор Иванович Тютчев. Кн. 1. М., 1988. С. 231.

<sup>32</sup> ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ (下)』222頁。

これは崩壊どころか「ありそうもない噂」が広がることくらいしか変化の見られない日常の閉塞感が支配しているモスクワの光景である。巨匠とマルガリータが目にしたような崩壊による救済すら許されていない現実のモスクワは、最も悲観的な歴史的ヴィジョンであると言えるのではないだろうか。

『巨匠とマルガリータ』と同じく 1920 年代のモスクワを描いた『ドクトル・ジヴァゴ』でもやはり最終章で主人公は突然の心臓疾患による「死」によって現実のモスクワという位相から姿を消す。巨匠とともにモスクワから飛び去ったマルガリータと同様、ジヴァゴの恋人ラーラも彼の死後モスクワから突然姿を消す。この作品の最終章は次のように締め括られている。

ある日、ラーラは家を出たきり、二度ともう戻らなかった。その何日かのうちに街頭で逮捕されたらしい。生死のほどは不明だが、おそらく北部地方に無数にある男女混合の、あるいは女だけの収容所の一つで、姓名のない番号として忘れ去られたものだろう。後にはその番号を記した名簿さえも失われてしまったのである。<sup>33</sup>

『ドクトル・ジヴァゴ』にもエピローグが付けられているところは、『巨匠とマルガリータ』同じだが、パステルナークのモスクワ描写はブルガーコフとは異なり、先に引用した通りこの街自体、そしてロシアそのものの復活を予感させるものとなっている。

パステルナークが描くのは、ブルガーコフとは対照的な復活により永遠の生命を得たモスクワである。この小説の中でローマに対したびたび言及が及んでいることから、パステルナークが作品の最後に「第三のローマ」のイメージを響かせたかったことは間違いがない。しかしローマは必ずしも、肯定的イメージを持って描かれてはいない。ジヴァゴの叔父は作品の冒頭で次のように語る。

古代にあったのは、あらゆる圧制者がいかに無能かなど疑っても見なかった、残忍な、あばた面のカリグラたちの血に飢えた野獣的所業だけでした。そこにあったのは青銅の記念碑と大理石の円柱の、高慢で死んだ永遠だけでした。時代と世代はキリスト以後ようやく自由に息づき始めたのです。彼が現れた後初めて、生命は子孫の中に生きはじめた。そして通りの塀の下ではなく、我が家である歴史の中で死ぬようになったのです。<sup>34</sup>

残虐のきわみをいくローマの圧制がキリストの誕生によりローマがキリスト教の世界に入ることによって歴史の中に生きるようになったという考えが述べられている。

ローマがネガティヴな視点からモスクワにたとえられていることは、次のようなラーラの夫の行動に対する発言からも明らかである。

<sup>33</sup> Пастернак Полное собрание сочинений Т. 4. С. 499.

<sup>34</sup> Там же. С. 13.

これは私には理解できないもの、人生などではなく、何か古代ローマ人の市民的自己犠牲、いま流行の革命の極意なの。<sup>35</sup>

また小説のエピローグでは登場人物のひとりが次のように語る。

このようなことは歴史にはもう何度かあったよ。理想的に高邁に考えられたものが、粗野になり、物化してしまう。ギリシャがローマになったのがそうだったし、ロシアの啓蒙運動がロシア革命になってしまったのがそうだった。<sup>36</sup>

このような作品におけるローマの言及が何を意味するかは、パステルナークが従妹オリガ・フレイデンベルグに送った手紙から窺い知ることが出来る。彼は次のように書いている。

ローマ帝国の崩壊後にも、いくつかの民族は存在し、その未成熟な民族性の上に文化を作り上げる可能性があるかどうか（1946年10月13日）<sup>37</sup>

「破滅を運命付けられたローマ」というモチーフをブルガーコフと同様、利用しながら、そのローマの後継者としての文化を作り上げる可能性をモスクワに見出している。一見すると「モスクワ—第三のローマ」説を唱えているかのように見えながら、これはやはりパステルナーク独自の世界観に基づいている。なぜならモスクワは革命による終末的な世界を経験したゆえにその資格を得るという考えがここにはある。反乱を翻した兵士たちに政治委員が惨殺される光景や、エピローグでジヴァゴの娘が語る強盗の物語など、この小説にはパステルナークの抒情的描写には相容れない、残虐な場面がリアリスティックに描かれている。それは上で引用した例の文脈から明らかなように粗野で暴虐なローマと革命期のロシアとの類推である。

復活するためにこそ一度滅びるという考えは、パステルナークの作品には「<sup>やまい</sup>病」という形で繰り返し現れるモチーフである。『ドクトル・ジヴァゴ』の中においてチフスに冒されたジヴァゴが熱に浮かされた夢の中で叙事詩に関する構想を得る。

彼が書いていた叙事詩は復活についてでもなく墓中への埋葬でもなく、このふたつの間に位置する日々についてであった。この叙事詩は「惑乱」と題されていた。

彼が書きたかったのは、黒いうじ虫となった土くれが嵐となって3日間吹き寄せ、大小さまざまな土の塊を彼にあびせながら、まるで打ち寄せる波が滑走して飛び立ち海の岸辺を丸呑みしてしまうかのように、不死の愛の化身を襲ってくるさまである。[...] 地獄が、崩壊が、不愛が、死が、彼に触れようと心待ちにしていた。しかしそれと同時に彼に触れようと願うものに

<sup>35</sup> Там же. С. 299.

<sup>36</sup> Там же. С. 513.

<sup>37</sup> Пастернак Б. Переписка с Ольгой Фрейденберг (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1981), p. 245.

は、春が、マグダレーナが、生命があった。だからこそ目覚めのときなのだ。目覚め起き上がるべきときなのだ。復活のときなのだ。<sup>38</sup>

事実パステルナークは 1923 年に革命について執筆した叙事詩を「高貴な病」と題した。革命、戦争といった歴史的な災いを彼は、惰性的な日常を破壊し復活するための「病い」と肯定的に評価しようとした。しかしブルガーコフのようにその現実のモスクワを置き去りにし、現実とは別の位相に属する時空間に救いを求めているのに対し、パステルナークの描くモスクワはあくまでもその歴史的継承性の延長線上での救済を未来に見出している。

## むすび

「モスクワ—第三のローマ」の響きを感じられる作品をここまでいくつか概観してきたが、それはその源流になった「ダニエル書」を初めとしそこから派生してきた宗教文書、その作品が生み出される時代の思想的背景、芸術家個人の世界観と融合し、さまざまな形で変奏されて来たことを証明していた。

個々の古い公式あるいはドクトリンが新しい時代に転移される際、それは時代や、国民意識あるいはメンタリティとの安定したつながりを必ずしも提示しない。その反対に時には同時代を説明する、未来を創造するために利用される意識的できわめて主観的な過去のパラダイムの同時代への投影であるのではないだろうか。

---

<sup>38</sup> *Пастернак Полное собрание сочинений Т. 4. С. 206.*